

茶の湯文化学会会報 No.19

第19号 / 1998年10月1日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

正伝院（織田有楽）と永源庵（細川頼有）

正伝院 住職 貞神 仁宏

現在当院は正伝永源院という長い寺名になっております。『寺』や『院』をつけて三字というのが普通です。近隣の人達は『正伝院』とか『永源庵』とかで呼んでいます。「正伝永源院は？」と尋ねても「サア」と首をかしげる人も「正伝さんは？」と聞くと「ア、有楽さんの寺ですか」と答えてくれます。勿論元は別々の寺でありましたが明治初年の廃仏毀釈運動の結果このようになってしまったのです。

とにかくこの運動は凄じかった様子で京の街中にある建仁寺は恰好の標的であったようです。最盛期には六十近くの塔頭があったものが十四ヶ寺に激減してしまっただけです。その凄じさが察せられます。その施策の要点は無住の寺の取壊しにあったようで当時住職の無かった永源庵はたちどころに廃寺の憂目にあってしまいました。ところが幸か不幸かこの寺は本山の真北に道一つ隔てて位置していたため堂宇だけは難を逃れたのです。一方正伝院は現在の『有楽町』と呼ばれる祇園歌舞練場の北にありました。ということは本山とは少し距離があるため廃寺となった永源庵へ場所を転移しました。現在当院本堂に収めております伝狩野山

楽筆の金地著色蓮池図襖十六面や雲谷等顔筆と伝えられる水墨山水画十七面等もこの一部です。他に織田有楽の遺品を始め古文書や茶道具類なども数多く移されました。しかし建造物や庭園はそれもできず、ある物は売却され又ある物は取壊わされてしまったのです。国宝「如庵」や重文「書院」などはその時に売却された代表的なものといえます。正伝院の本堂や「都林泉名勝図会」に見られる優美な庭園は無残にも取壊わされてしまったのです。このような激動の後、暫くは永源庵の名も消えていたようですが、永源庵は当時侯爵であった細川氏の菩提寺ということで再び永源の名が呼びあがりここに正伝永源院という寺名ができたのです。

正伝・永源いづれも建仁寺の塔頭であることはそのことでおわかりだと思えます。建仁寺はわが国臨済宗の開祖であり茶祖でもある千光祖師・栄西禪師を開山に建仁二年（一一〇二）源頼家公の庇護のもと創建されました。当初は天台・真言・禪の三宗を置き純粹な禅寺でなく兼修禅のすがたで新興仏教としての種々の迫害を避けたようです。建仁寺が純粹禅としてそれまでの兼修禅を一掃するのは鎌倉五山の一つ建長寺の開

山で当山第十一世の大覚禪師・蘭溪道隆からです。開山業西は「わが没後五十年禪法大いに世に興らん」といわれたようですが、同じく第十世の聖一國師・円爾弁円(東福寺開山)の頃より当寺が興隆したことの予言のようです。因にそれ以降の住持には清拙正澄(二三世)、雪村友梅(三〇世)、龍山徳見(三五世)、中巖円月(四二世)、義堂周信(五五世)等、五山文学の巨星が名を連ねています。

さて話を戻しますが正伝院は大覚禪師の法嗣で中国より来日した勅諭普覚義翁禪師(建仁十二世)を開山に創建されました。しばらく荒廢していましたが大阪冬の陣後隠栖した信長の弟織田有楽斎により元和四年再興されました。

有楽斎はそこに名席「如庵」を建て悠々自適茶道三昧のうち、元和七年十二月七十五歳の天寿を全うしこの地に永眠したのです。法名を正伝院殿如庵有楽大居士といい正室靈仙院殿蓬丘靖寿大姉と共に当院本堂の東に葬られております。

永源庵は無涯仁浩(建仁三九世)を開山に南北朝時代に創建されました。師は二十五年間中国にあつて禅を極め、帰国後細川頼有熊本細川家始祖)の帰依をうけます。すなわち

延文年中頼有が戰場へ赴こうとして同庵の門前で無涯に会い馬上から問法したことが縁で師資の約束をしたといえます。以後細川家が同庵住持に対する帰依は深まり同家から同庵に出家するもの、住職になるものさえ出来ました。因に現在の細川家の永青文庫の「永」はこの永源庵からとられたものです。

当院の三門を通りますと左手に墓地があります。向って右手に有楽斎並びに正室・孫の三五郎長好、同一兼妻の妻の四基の石塔が並びます。有楽斎の真向いには細川頼有公並に以後八代の自然石の石墓があり、その隣りには賤ヶ岳七本槍で名を馳せた福島正則とその家臣十数名の碑が並んでおります。

もう随分前のことになりましたが千利休の映画が作られたことがありました。その折、元総理の細川護熙氏が織田有楽斎役で出演されました。武将として或は茶の湯の数寄者として戦国の世に有楽斎と三斎公の出会いが数多くあつたとしても正伝院(有楽斎)と永源庵(細川家)が結びつき正伝永源院となつた縁の延長と考えるのは考えすぎでしょうか。平成八年に国宝「如庵」を誕生の地に再び、ということ京都工芸繊維大学名誉教授中村昌生先生の御指導のもと、当院責任役員永楽

善五郎氏(即全)等の援助により本歌と瓜二つの席が当院西に完成いたしました。この事業の名誉顧問には細川家御当主細川護貞氏にお願いし、同時に席の扁額もご揮毫いただきました。このように当院におきましては織田家と細川家が太いきずなで結ばれていることをご紹介して筆をおきます。

合掌

第九回研究会報告

平成十年八月二十九日、山口県萩市の山口県立美術館・浦上記念館において、本年度最初の研究会(通算第九回)が開催された。天候にも恵まれ、県内外から五十九人の参加者があつた。

倉澤副会長の開会挨拶に続き、研究会開催にご助力いただいた浦上記念館館長の足立明男氏より歓迎の挨拶があり、早速研究発表に移った。

今回の発表は、下関市教育委員会教育次長木本信昭氏の「萩焼に見る伝統と創造」、当学会理事でもある戸田勝久氏の「毛利重就と花月楼」の二本で、発表の概要は次のとおり。

発表1

萩焼に見る伝統と創造

木本 信 昭

(一)浮世絵と中国陶磁を収集する県立萩美術館に、茶室ができた。三輪龍作や中川幸夫による茶室の創出は、茶の湯の関係で賛否両論があると聞く。「伝統と創造」をテーマとする美術館に、このような創造的空間が造られた意義は大きい。利休に立ち返れば、茶の湯は本来『出世間の法』の世界だ。『茶陶萩焼』をめぐる問題を、考察する。

(二)『茶陶萩焼』のイメージはどの時代にくられたか。伝統的な茶の湯への固定観念が、萩焼の歴史をわかりづらいつらいものにしてきた。

(三)毛利輝元が広島から萩に移るのは慶長九年(一六〇四)、城下町萩の実質的経営者は古田織部と親交の深かった長府藩初代毛利秀元で、初期の萩焼はこの秀元の強い影響を受けたと考えられる。織部の道具観は茶の湯における創造性の一つの象徴だった。

(四)萩焼は、これまで高麗茶碗との関係で語られることが多かったが、近年、窯跡の発掘や山口県美の榎本氏の研究により見直しが始まっている。

それは、李朝祭器の特徴を色濃く遺した初

期萩焼から、織部風への転換と位置付けることだ。つまり、萩焼の始祖として朝鮮から渡来した陶工を高麗茶碗の名手と位置付け、時代の変遷と共に和様化すると考える萩焼の通説を否定するものだ。

(五)村田珠光を経て利休に繋がる、禅と茶の湯の関係は、善悪・生死・自他など対立概念のなかで生活しながら、それらを超越した「永遠のいのち」へ憧れに象徴される。それが無我とか無心と言う禅の境地になり、利休の言う「直心の交わり」になるのだろう。

(六)江戸時代、本来の茶の湯がもつ『出世間』



や『手柄一つ』(創造性)を喪失した側面もあつた。

(七)三輪休雪は、茶陶における創造性、造形性をすすめる三輪龍作や兼田正尚等、次の世代は、純粋な造形作家として『作品』創り出す。茶の湯の関係者と陶芸作家との緊張関係が、明日の萩焼への期待と新たな『創造』への道を切り拓くだろう。

発表2

毛利重就と花月楼

戸田 勝 久

毛利重就、享保十年(一七二五)寛政元年(一七八九)。元就の孫秀元を祖とする、長府毛利家(四万七千石)の巨匠(まさひろ)の十男として、江戸日ヶ窪邸に生る。(幼名岩之允)享保二十年、兄師就の死去により、その遺領を継いだ。元文四年従五位下甲斐守に叙任している。

しかし、宝暦元年(一七五一)二月、宗家(萩三十六万九千余石)の宗広が三十七歳で卒去したので養子となつて、毛利家七代の当主となつた。初めの名は匡敬(まさよし)である。同年六月、將軍家重の諱字を与えられて、重就(しげなり)と名乗り従四位下侍従に昇任

した。

この名乗であるが、今「しげたか」が通用している。これは、十一代將軍、家齊の宣下(天明七年)に会って、同音を憚ったとされているが、重就は天明二年には致仕しているから、別の理由があるのかもしれない。因みに「寛政譜」は、「しげなり」である。

安永二年、少將に進む、家の称として松平大膳大夫を用いている。致仕の後、式部大輔に改めた。室は立花貞淑の女で、嗣子治親は、田安宗武の息女と婚を通じている。また文久三年居城を山口に移して、維新の旗頭として活躍する敬親(たかちか)は、血系の上で曾孫にあたっている。

重就の伝記は「英雲公と防府」(香川政一、昭和十一年八月刊)が詳細で「財政の確立、産業の開発、教育の振興」をはかった「中興の英主」としての事蹟が述べられている。また基本図書として「毛利十一代史」(大田報助、昭和四十七年七月、名著出版が復刊)がある。川上不自に関する最近の研究書として「川上不自の茶」(講談社、平成三年七月)と「千家の茶の展がり、宗全・不自・宗達」(婦人画報社、平成七年十一月)があり、不自の茶室について前書に中村昌生氏、次に中村利則

氏の論稿があり啓発される。また、平成九年七月二十九日・九月七日、江戸東京博物館に於て「遊びと求道の心」展が催され、防府市多々良毛利博物館所蔵の、重就画像、また不自の画賛と書付道具七点(図録収載)などが展覧された。

今回の報告に際し、毛利博物館に於て、重就手造の黒樂茶碗、樂焼一對の宝珠香合など数点を拝見したし、防府市茶屋町の英雲荘に移築されている、花月樓(防府の国分寺内に重就が健造したもの)の見学、また山口県文書館(山口市後河原)の「三田尻邸花月樓差図」など絵図等、十四点を調査させて頂いた。記して謝意をお伝えしたい。

見学会

研究会の翌日、三十日には見学会が行なわれ、五十五人が参加して、バスの補助席すべてを使用しなければならぬ程の盛会であった。

午前九時の集合時間に一人として遅れることなく、最初は坂高麗左衛門氏の窯を訪問。作品陳列室、資料室、窯を四班に分かれて順

次見学、広間では奥様に抹茶を全員に振舞っていただき、御当主には資料室で解説をしていただいた。

次には毛利藩の御用商人であった菊屋邸を訪問。邸内と共に普段は見せてもらえない茶室を特別のはからいで見学させていただく。菊屋邸は重文に指定されており、常時公開されているため、ご家族は別に小さな家を建てて住まわれているとか。御用のために尽くすのが菊屋の家訓ですとは、奥様の説明であったが、伝統と格式のある家を守っていくためには多くの苦勞があることを実感した。

海岸沿いのしゃれたレストランで昼食をとった後、松陰神社へ。ここでは前日の発表にあった花月樓を、戸田理事の説明を聞きながら見学し、あわせてその近くに保存されている幕末から明治にかけて多くの人材を輩出した松下村塾を見学したが、意外と小さな建物であったことに一同は驚いた様子であった。最後の訪問先は指月城跡。この城は明治初年に取り壊してしまったとか。今から思えばなんとも惜しいことをしたのだが、石垣と堀によって往時の面影を偲ぶことができる。

城跡は公園となっていて、そこに旧梨羽家茶亭と花之江茶亭が移築保存されている。旧

人はここで別れて、バスは一路新幹線の小郡駅を目指す。帰りの車中では一日の疲れでウトウトする人も多く、一時間はあつという間に過ぎて、駅については予定通り午後四時であった。



東京例会

去る五月三十日(土)、午後三時より東京学芸大学講義棟を会場に東京例会が行なわれました。報告は水上和則氏、テーマは「中国茶器における釉薬調合の流れ」でした。

五月三十日(土)
「中国茶器における釉薬調合の流れ」
水上和則氏

中国の陶磁器について、釉薬の分析等、広い観点から研究されている水上和則氏にお話を伺った。その内容は、多岐にわたるもので、多数のスライドと、氏が持参された茶碗などの考古文物を見せていただきながら、主に次の事項についてお話しいただいた。唐代の各地の窯とその特徴について、法門寺出土の秘色碗について、宋代の建窯の歴史と発掘の現

状について、宣化区遼墓の壁画に見られる茶具について等であった。いずれも、氏の近年の調査を踏まえたお話で、最新の情報を教えていただき、中国の茶の歴史を考えるうえで有用であったばかりでなく、建窯に於ける建盞と珠光青磁の生産について等、日本の茶道史とかかわりの深い事実を知ることができた。

(文責 高橋忠彦)

近畿例会

平成十年度二回の近畿例会は七月三十一日(金)、午後六時三十分より京大会館を会場に行なわれました。参加者は三十七名。概要は左記の通りです。

シンポジウム「庸軒をめぐって」
村井康彦氏 坂井輝久氏
中村利則氏 谷晃氏

本年は藤村庸軒の遠忌の年に当ることから「庸軒をめぐって」をテーマとしてシンポジウム形式で行なわれた。倉澤副会長の挨拶に続いて谷晃氏の司会によって先ず基調報告からはじめられた。

村井康彦氏は庸軒の著書「茶話指月集」はエピソードから教訓を得るという意味で最も典型的な茶書であること。一方で茶人として



梨羽家茶亭はきのこの発表にあつたように花月樓形式の茶席だが、上段の間がない。一方の花之江茶亭は、別名煤払いの茶亭とも呼ばれ、もとは毛利家の別邸にあつて本邸が年末の煤払いの際は藩主がここへ避難したことからの名称だという。

地元萩から参加した人や、他に予定のある

は珍しく漢詩をつくり、後に化政文化の拠点になる鴨川の東岡崎の地に住するなど、後世に与えた影響も大きな人物であったことなどを述べられた。

次に坂井輝久氏は「庸軒詩集」を取り上げ、三百十九首が庸軒六十三才の一九七五年から七十一才の一六八三年までのほぼ十年間に作られた漢詩を収録している事、庸軒の周辺には三宅亡羊、石川丈山など漢学の素養に富む人物が多かった事、さらに茶道具には漢詩を銘とした「詩銘」が多い事などに言及され、これらから推測すると庸軒は朗らかな性格だったのではないかと結ばれた。

最後に中村利則氏が庸軒の茶室について西翁院の「淀看席」などを例にあげて特徴を話され、さらに西洞院下立売にあった庸軒屋敷の茶室を「数奇屋囲之図」や「数奇屋工法集」などと対比するなかで、千利休や織田有楽の影響がみられるのではないかと特色を述べられた。

その後、討論に移り「庸軒詩集」には明らかに誤りだと思われる文字もあるので注意が必要であること、庸軒邸のような町屋の茶室では後段の振る舞いが行なわれることも多かったため、これを念頭において庸軒の茶を

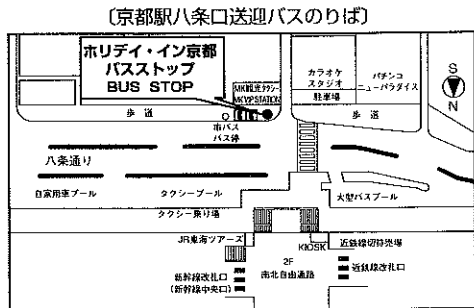
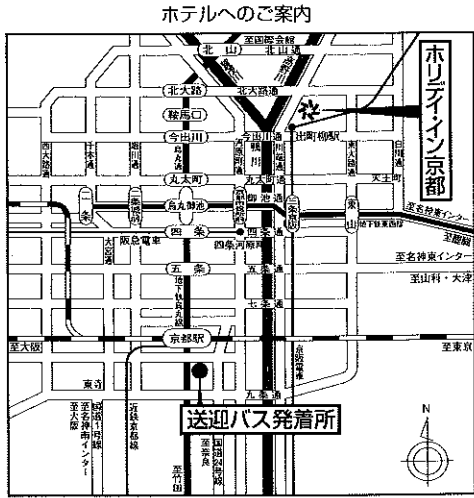
考えた方がよいのではないかと、さらに今後は漢詩から庸軒の美意識をみることも重要ではないか、などが話あわれて、最後に村井氏が庸軒を通じて十七・十八世紀における茶の湯の高揚と千家の茶およびその周辺の有様を知ることができるのではないかと結ばれた。

この後、会場からの活発な質問や感想が寄せられ、例会は終了した。

すでにお知らせをしておりますが、平成十年度の大会を左記の要領で開催いたします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。参加・申し込みは事前振込み制となっておりますので、ご留意下さい。

日時 平成十年十月十八日(日)
会場 ホリデイ・イン京都
ホリデイホール

京都市左京区高野西開町三六
電話〇七五(七二二)三三三三
参加費 千円(非会員は二千円)
懇親会費 九千円
受付 十二時三十分より



- 京都市八条口より無料送迎バス運行(ホリデイ・イン京都→京都駅八条口)
- 電車
- 地下鉄
- 市バス(高野橋東詰下車)
- 京都市バス(高野橋東詰ホリデイ・イン京都前下車)
- 京阪三楽橋口より
- JR京都駅よりタクシーで20分、大阪・大塚空港よりタクシーで70分

大会(いも)の見学会のお知らせ

日時 平成十年十月十七日(土)
場所 茶道資料館

(京都市上京区堀川通寺之内上ル)

見学 「交趾香合」展

解説 赤沼多佳氏「交趾香合について」

(午前十一時より)

茶道資料館へは十七日・十八日の両日、大会案内封筒を提示していただければ無料で入館出来ます。

※十月十七日(土)・十八日(日)は、大会案内封

大会のお知らせ

研究発表第一部 十三時十分～十四時四十分

- 一、船富美子氏 「館柳湾の漢詩に見る煎茶」
- 二、中村 順行氏 「茶の品種育成と普及動向」
- 三、横内 茂氏 「小堀遠州茶会記集成」に見る 遠州の茶花

休憩
研究発表第二部 十五時～十六時

- 四、伊藤 嘉章氏 「美濃古窯文書に見る 桃山江戸の茶陶器」
- 五、仲 隆裕氏 「近世初頭の数奇屋と庭園」

休憩
講演 十六時三十分～十七時三十分
三崎 義泉氏 「茶の湯における 『しぜん』と『じねん』」

閉会挨拶 十七時三十分
懇親会 十八時
ホリデイ・イン京都
本館四階大文字の間

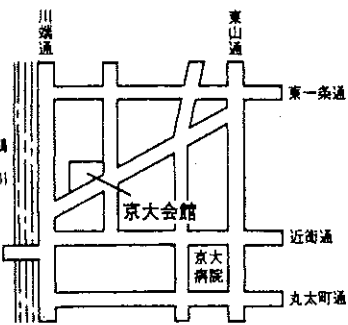
例会のお知らせ

近畿例会は、これまで同様、京大会館を会場として午後六時三十分より行なわれます。参加は自由です。会員の方々のご来聴を歓迎します。

平成十年十二月十二日(土)
シンポジウム「発掘庭園をめぐって」

(司会) 尼崎博正氏
(発提者) 稲垣正宏氏
仲 隆祐氏

会場略図(京大会館)



京大会館
〒606 京都市左京区吉田河原町15-9
TEL(075)751-8311(代)
FAX(075)761-5403

※例会のお知らせは、この「会報」のみです。開催日時等にはご注意ください。

東京例会

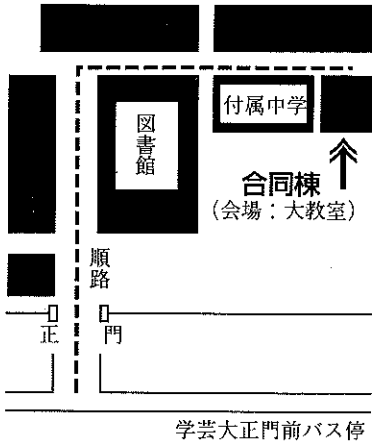
東京例会は東京学芸大学(小金井)を会場に行なわれる予定です。今回は「合同棟」の大教室が会場です。いつもとは変わっていますのでご注意ください。

十一月二十八日(土)午後二時より
「三井家の茶道具」

清水 実 氏(三井文庫)

その他、平成十一年一月三十日ならびに三月二十七日にも予定されています。

会場略図(東京学芸大)



発表者・会誌・会報原稿募集

大会・研究会の発表者を募集しています。

大会は一報告につき、報告二十分、質疑応答十分。研究会は報告六十分、質疑三十分程度です。

次の例会のご案内

東京例会

十一月二十八日(土)午後二時

場 所 東京学芸大学

合同棟

テーマ 「三井家の茶道具」

発表者 清水 実氏

近畿例会

十二月十二日(土)

午後六時半

場 所 京大会館

テーマ 「発掘庭園をめぐって」

発表者 尼崎 博正氏

稲垣 正宏氏

仲 隆裕氏

発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。ご連絡の際は、大会・研究会の三カ月ほど前に、八百字程度の梗概を大会、研究会応募の別を明記して、事務局までお送り下さい。

※会誌「茶の湯文化学」の原稿を募集しています。「投稿規定」をご覧の上、ご投稿下さい。

事務局報告

※遅くなりましたが会報十九号をお届けいたします。すでにご案内がお手元に届いていることとは思いますが、平成十年度の大会が十月十八日(日)に、これに先だって十七日(土)には見学会がおこなわれます。大会での報告に加えて、秋の展覧会シーズンでもありますので、各館とも特色ある茶道展示が行こなわれています。錦秋の一日、ふるってご参加下さい。

※過日おこなわれました第九回研究会(山口県萩市)及び見学会も盛会裏に終了いたしました。見学会の折りの観光バスのなかに「旅王国◎萩・津和野」のガイドブックの忘れ物がありました。学会事務所でお気づかりしていますので、お心当りの方はご連絡下さい。